

## 蒔ける田・植ゑし田

斎種蒔く、新墾の小田を、求めむと  
 足結び出で濡れぬ、この川の瀬に

(巻七—一一〇)

歌は「清浄な種を蒔くべき新墾の田を探そうとして、妻が結んだ改まった装束を身につけて家を出て、この川の瀬に濡れたことだ」という意味だが、ここには田に種を蒔くとある。ほかに、『万葉集』には「我が蒔ける早稲田の穂立(一六二四)・「住吉の崖を田に墾り蒔きし稲(二二四四)・「青楊の枝伐り下ろし湯種蒔き(三六〇三)など種を蒔くと表現する例がある。さらに『皇太神宮儀式帳』にも伊勢神宮で奉祭する神々の食膳に供えるための御田に「種を蒔き下ろし始」めると見えるから、田に直接種を蒔き散らすことがあったのは間違いない。



等間隔に植えられた苗(友の会の田植えにて)

その一方で、『万葉集』には「小山地の苗代水の中淀にして」(七七六)・「苗代の小水葱が花を」(三五七六)など苗代田が垣間見られる。苗代田を作ったのなら、かならず苗を植える作業つまり田植えが行われる。では万葉の時代の稲作はじか蒔きだったのか、それとも田植えだったのか。解釈はいろいろできる。かつてはじかに種蒔きしたが、この時代にはもう田植えに変わっていた。そのなかで種蒔きは古い農法として記憶され、文学

的世界でのみ用いられる表現であったという解釈ができる。また苗代田への種蒔きであれば、ともに記されていて不都合でない。そういう折衷もできる。しかし無造作に種をじか蒔きするより、田植えならば雑草に生育を邪魔されず多くの収穫が期待できる。この農法の高度化が、日本人による内的な努力や発見のせいとは思えない。岡山市百間川遺跡の弥生後期末あたりの水田跡では、稲株跡の間隔が規則的で、すでに田植えが行われていたと見られる。苗代・田植えというやり方は、水稲耕作を持ち込みまた採り入れた当初からそうだった、と考えるのが穏当だろう。

では『万葉集』の二つの表現はどういう差だったのか。どうやら基本は田植えだったが、開墾したばかりの田、生産条件が不十分な田、生産性の低い田などの場合にはじかに種蒔きすることがあった。そういうことだったようだ。